

蘇父を想う 00.03.20(日)

00年・03月・20日

福迫氏からメールでもらった神鍋ジャイアンツの画像を、デスクトップの片隅に配置し、メモ帳に思いをパンチしています。懐かしい姿です。思い出すまま、私とジャイアンツの出会いをお伝えします。

1984年(S・59)37才で、山スキーを購入した年です。

それまではゴールデンウィークに、八方尾根、中央アルプス・立山と、年に一本、ゲレンデから離れ、山中で滑る魅力に段々と深く取り付かれていました。もちろん登山靴とゲレンデスキーの併用の山スキーでした。それなりに山に合わせて装備に工夫をしていた記憶があります。

この前年の1983年、立山の平蔵谷を滑り終え、スキーはザックに固定し、足元は登山靴かスキー靴かで、剣沢を登り返している時、見たんです。かかとの上がるスキーを。雪山とスキー



のコンビネーションの、遊びスタイルは、このとき決定づけられたといっていいいでしょう。

1984年山スキーセットを購入し、地図と装備をイメージレーニングでチェックし、未知の装備で未知の雪山へ、次々と入っていきました。

行くごとに異なる大自然の神々しさと雄大さ、そこに巧みに振舞う自分が有る。感動と充実の申し分無い舞台でした。

その年初めて奥神鍋から蘇父を目指しました。地図と磁石を頼りに樹林帯を抜けた時、この真っ白の坊主山が眼に入ったのです。でっかく感じました。こんなに素晴らしい世界がここに有る事が信じられないくらいでした。

「これが蘇父の山頂かと、その時確信したのを覚えています。

その年は大雪の年で山頂へ、のっこすのに2メートルほどの垂直の雪壁が出来それを越すのに苦労したのを覚えています。

それ以来この山を「神鍋ジャイアンツ」と名づけたんです。